

入門セミナー実施に関する事例報告

青 嶋 由美子
岡 本 雅 子

I. はじめに

豊橋創造大学短期大学部幼児教育科に入学する学生の多くは、幼児と接する仕事に大きな意義を見出して、それを進学の実動機としている。しかし、最近では少子化や進学率の高まりもあって短大進学が容易になったせいもあって、進学後、カリキュラムを消化出来なかったり、実習先で不適合を起したりする学生も増えてきた。この問題を解消すべく今年度幼児教育科が立ち上げたのが「入門セミナー」である。所謂小人数授業（寺小屋形式）の形態で、教員と学生の接し方を密なものとし、個々の学生が抱える問題を拾い上げることに重点を置く、それと同時に、学生に欠けている知識や技能を修得させる科目とするべく立案された科目である。その中には大きな柱として三点を設けている。まず第一に、何らかの形で人と繋がっていないと不安を感じながらも、自分からは積極的に人間関係の構築に踏み出せない学生に、規模の小さな集団生活を経験させる。そうすることで、人の輪の一員として生きる大切さを知らせる。次に、本来であったら、家庭が担ってきた生活基本技術の伝達を肩代わりする。家庭環境によっては、親世代から

の基本技術伝達が行なわれていない学生も居る。そういった学生がそのままの状態では幼児教育の現場に立つことは、保育される幼児にとって大きな不幸と成り得る。それを防ぐために、授業の中でその種の技術を実践させる。第三の柱は読書である。本を読む経験が乏しく、また、読む種類が偏っている学生に、幅広い内容の書物を紹介し、広い視野と豊かな見識を備えた人間へと成長してもらいたいという願いを籠めているのである。

このような経緯のもと、平成14年4月、「入門セミナー」は開講された。

II. 平成14年度春学期「入門セミナー」実施記録

1. 4月18日（木曜日）実施分

（3セミナー合同で実施）

「入門セミナー」の初回ということもあり、合同でガイダンスを実施した。

使用テキストの紹介の後、講義予定表を配布し、それに沿って、各時間の主たる担当者が、その時間の目的・講義に必要な道具・下調べの課題等の説明を行なった。

さらに、使用テキストにて説明されている生活技術について、実際に出来るかどうかのチェックを全項目について行い、学生

達に、現在の自分の力量を知ってもらった。

授業の初回ということもあって緊張している学生も多かったが、生活技術のチェックの頃になると少し慣れてきた様子で、教員に積極的に質問する学生も出て来た。56人単位の形態になったが、教員が3人つくということもあり、キメの細かい対応が出来たように感じられる。

・配布資料 講義予定表

2. 4月25日(木曜日)実施分

(各セミナー単位で実施)

各セミナーに分かれて初めての実施ということもあり、短大生活の開始にあたって、同じセミナーの友人を知ること、また、学内の施設を十分に活用出来るような案内を目的とする時間とした。

各セミナーとも、自己紹介を中心に、学内の構造(特に教員の研究室が何処か知りたいという声が多く出た)を理解したり、学生間での連絡網作りを行なった。

図書館スタッフの協力を得て、図書館の利用法について、各セミナー30分程度のガイダンスを受けた。図書館は、学生生活を送る際、勉学面で大きな助けとなる場であるので、最初の時期にしっかりした利用法を知った意義は大きいと感じられる。

・配布資料

- ① 学内案内図
- ② 図書館案内図
- ③ タンポポの見分け方の新聞記事
(一部のセミナーのみ)

3. 5月1日(水曜日)実施分

(1年生全員合同で、多目的ホール及び
体育文化ホール・アリーナにて開催)
5月2日分を時間変更しての実施

新入生歓迎会の形で、教員サイドでは前田・岡本、そして、2年生の立案・協力を得て実施した。

2年生の「わいわく委員」を中心に、多くのセミナーが参加して、1年生歓迎のアトラクションを演じてくれた。2年生の圧倒的なパワーに、最初1年生は、呆然としていたが、段々とリラックスし、共に演じる姿勢が見られるようになった。参加者の多くから、「楽しかった」「2年生のパワーを感じた」「早く先輩達のように、色々な手遊びやパフォーマンスが出来るようになりたい」「2年生に負けないように頑張りたい」といった前向きな感想を得られた。

岡本セミナー

ダンス発表(「とっここハム太郎」「おはロック」)

佐野セミナー

ダンス発表(「鬼のパンツ」「キティちゃんのパラパラ」)

大森セミナー オカリナ演奏・巻き絵

芳賀セミナー 折り紙伝授

藤本セミナー 手遊び

前田セミナー

エプロン・シアター、パネル・シアター、遊び歌(「アブラハムと七人の子」)

青嶋セミナー

手話での歌(「世界中の子どもたちが」「いつも何度でも」)

後半は、アリーナにて、少人数のグループに分かれ、そのグループにわいわく委員や有志の2年生が2~3人ずつついて、1年生の質問に答える形で、短大生活の案内をした。

- ・反省点
アリーナは床が板であるため、体を冷やした学生が多かった。
- ・配布資料
 - ① プログラム
 - ② 2年生が準備したプリント類（グループ分け・折り紙等）

4. 5月9日（木曜日）実施分

（3セミナー合同で、美術室にて実施）

技能研修の初回であり、カッターナイフ・小刀・肥後守等の刃物を用いて、実際に鉛筆を削ってみるという内容で実施した。

学生には、刃物及び鉛筆二本を各自準備してくるように連絡をしておいて、当日を迎えた。

授業の始めに、削りカスを入れるための容器を作らせた。折り紙で「キャンディ・ボックス」を作成した。迷わず作れる者と、なかなか作れない者に分かれた。上手に作れた者が、教えてあげる姿も見られた。15～20分程で、全員作り終える。その後、容器が小さいために、二時間目については、反故紙を準備して下敷きとして使用させた。

実際に鉛筆を削る際には、学生は、最初、おっかなびっくり始める者が多かったが、すぐに慣れて、刃物の扱いにも危うさは見られなくなった。両クラスとも、これまでに経験した者が僅かだが居て、達者な腕前を見せてくれた。幼い頃身に付けた技能が、現在でも生かせるという点を実感した者も居る。

鉛筆を持った手の親指で刃物の背の部分を押すという指導で、怪我をする学生も居なかった。

- ・配布資料
『キャンディ・ボックスの作り方』
また、風呂敷敷と安全ピンを使つての、忍者の扮装の仕方も実際にやってみた。

- ・反省点
鉛筆削りに予想していた程、時間がかからなかった。

- ・改善案
色鉛筆のセットを用意して、その一本一本を削って名前を入れるようにしたらどうか。

5. 5月16日（木曜日）実施分

（3セミナー合同で、美術室にて実施）

技能研修の2回目である。前回の内容を受け、糸巻きと割り箸を利用した「糸巻きタンク」というおもちゃを製作した。カッターナイフで糸巻きの両縁に細かい溝を入れ、両サイドに輪ゴムを通し、輪ゴムの捻りを動力として転がって前進するタイプのおもちゃである。

準備してくるようにと指示してあったものは、糸巻き・割り箸・輪ゴム・輪ゴムを通すためのピン・蝋燭・カッターナイフ・軍手である。

木製の糸巻きであれば溝を削る際にナイフが滑ることは少ないが、学生が準備したものは殆どプラスチック製であったため、非常に滑りやすい状態となった。危険性を感じたので、必ず軍手をはめるように指示したが、何人かの学生は指示に従わなかったために怪我をしてしまった。

また、今回の授業では、カッターナイフを忘れた学生が複数出た。予備のカッターナイフだけでは数が足りなくなってしまい、大変困った事態となった。新入生が、学生生活に慣れ始めて気が弛み、忘れ物を

するようになったと思われる。この頃の指導に特に注意が要るのだと改めて認識させられた。

・反省点

軍手着用の指示を徹底させ、怪我防止に努めなくてはいけない。
万一の場合に備えて、応急処置を施せる医療品を教室に持ち込んでおく。

6. 5月23日（木曜日）実施分

（各セミナー単位で実施）

本を読むことを学ぶ回とした。「大学生・市民・人間として」というテーマの下に、幼児教育科専任教員から各3冊ずつの推薦図書コメントつきで呈示してもらい、それを資料として学生に配布した。

各セミナーで、推薦図書の抜粋或いは全文を資料として配布し、輪読会を催した。

通常の講義以外の場合で、現在の学生の読書力を目の当たりにして、「本を読まない」最近の学生の姿に改めて驚かされた。「読んでいる」学生も居るが、読書の質が十年前の学生とは大きく違っている。十年程前には、ジュニア小説しか読まない学生の存在に呆れたものだが、現在では、ジュニア小説でも読めばましな方だと言える。教員側が積極的に本に向かえるような国語力を付けさせる努力をする必要があるのだと痛感させられた。

・反省点

輪読会での題材を選ぶにあたり、学生の力に合った本を読ませるか、無理をしても質の高いものを読ませるか判断に迷った。担当教員で、この問題については意志統一を図るべきであった。

・配布資料

幼児教育科専任教員からの推薦図書及

びコメント

7 & 8. 5月25日（土曜日）実施分

（豊橋市視聴覚センター内プラネタリウムにて1年生全員で実施）

6月13日・20日の2回分のセミナーを振替

「入門セミナー」の中で唯一の学外研修として実施した。目的は、集団で公共施設を利用する場合のマナーを知る事であった。幼稚園教諭・保育士といった仕事に就くと、園児を引率して動物園やプラネタリウム等の施設を利用することになる。引率する立場になった場合に注意すべきことを事前に学ぶ機会を設けたわけである。研修に先立ち、「七夕伝説を正しく知る」「夏の星座について調べる」という課題を出してあった。

現地集合・現地解散という形を取ったが、自ら事前に電車の時刻や二川駅からの必要時間を調べ、安全に注意した行動を取る学生が殆どであった。遅刻者が数名出たが、連絡はしっかりと取られ、待機する側が焦らずに済むような心配りが出来ていた。

利用にあたっては、待ち時間に私語が多く、教室を離れて心が浮き立っているというのが伝わってしまった。「私語を慎む」というのは、団体で公共施設を利用する場合の基本であるが、それが実践出来なかったというのは大変に残念であり、今後の課題となった。

・反省点

学期初めの計画では、6月下旬に学外研修を実施する予定であった。そのため、学生への課題が「夏の星座」についてであったが、実際に見学したのは、「春の

星座」となってしまった。来年度は、この調整をしっかりとっておかねばならない。

9. 5月30日（木曜日）実施分

（前半 3セミナー合同・後半 各セミナー単位で実施）

「資料整理法を知る」というタイトルのもと、新聞の読み方・記事のスクラップ法等を実地に体験する回となった。

まず、全国紙・ブロック紙・地方紙、或いは総合紙・専門紙の区別、目的に合わせてどのような新聞を選ぶと良いかを資料に基づいて説明した。次に朝日新聞2002年5月27日朝刊に掲載された「受け継がれるアンネのバラ」という記事を使用して、見出し・リードの読み取り方、5W1Hといった基本的な記事の押さえ方を習得させた。

その後、学生が集めてきた7日分の新聞記事を改めて読み取る作業を行なわせた。今回は、新聞そのものを身近に感じてもらいたいという意図があったため、興味を持った記事を集めるようにと連絡をしてみた。学生が集めた記事は様々な内容にわたっていたが、特に多かったのはサッカー・ワールド・カップ関連、虐待、北朝鮮からの亡命者に関するものであった。

・反省点

新聞を読み慣れていない学生にとって、7日分の新聞記事の整理は、時間的に無理があった。また、記事が多岐多様にわたっていたため、纏め方の指導が難しい点があった。今後は、セミナー毎に統一テーマを決め、継続した内容で3日程度のを纏める方向で実施した方が良いのではないか。

・配布資料

- ① 全国紙（総合紙・専門紙）と地方紙の内容比較
- ② 朝日新聞より「受け継がれるアンネのバラ」の記事
- ③ 2002年4月より新聞で使用が認められるようになった漢字一覧

10. 6月6日実施分

（3セミナー合同で、多目的ホールにて実施）

昨今、当地豊橋でも物騒な事件が続くようになったため、学生の危機管理意識を高める目的で、「護身術を学ぶ」という体験講座を実施した。現職の警察官を講師として、暴漢に襲われた際の防御法の習得を目指した。約60分にわたって、手を掴まれた場合・抱きつかれた場合・前から襲われた場合・後ろから襲われた場合・顔面や額を狙ってダメージを与える場合等、場面に応じた撃退法や、蹴り上げると効果の大きい部位等をじっくりと体得した。一度だけでは完全にマスターする事は難しいと思われるが、一つでも二つでも身に付けようという学生の熱心な姿勢は充分に窺えた。

学生の感想の多くに「自分の身は自分で守るという意識を持てた」という内容があり、今回の危機管理意識を高めるという目的は、一応達成されたように思われる。

この授業の際に、痴漢の被害に遭っている相談が数人の女子学生からなされた。このような機会だったからこそ、学生も話をしやすかったとの事である。こういった問題について、今まで相談を受ける窓口がなかったことに思い当たり、学生理解に欠けていたという反省も為された回であった。

11. 6月27日(木曜日)実施分

(3セミナー合同で実施)

技能研修の3回目であった。今回のメイン・テーマは「箸を正しく使えるようにする」というものである。学科の性質上、正しい箸使いが習得されているという事が要求される場面が多い。幼児に教える立場になる学生が殆どだからである。初回のガイダンスの際に、この日までに正しい箸使いをマスターするようにと指示してあったため、テキストを参考にし、又、家族の協力も得て、春先から努力を重ねてきた学生も多いようであった。

紙皿に小豆・大豆それぞれ20粒ずつ入れ、塗り箸を用いて、もう一つの紙皿に豆を全て移すという作業を行なった。自信のある学生は、タイムを計りながら競ってこの作業を行なった。箸を正しく持てていない学生が若干居たが、本人達には、これではいけないという意識があり、今後も努力をすると誓ってくれた。

もう一つの作業として「紐を編む」事を実践した。女子学生の多くは、自分の髪を三つ編みにした経験からかスムーズに作業を進めていたが、男子学生は苦勞している者が目立った。また、作業量が多いことから、どうすれば早く編めるかといった工夫をする学生の姿も見られた。

12. 7月3日(木曜日)実施分

(各セミナー単位で実施)

「本を読む」をテーマとする2回目である。今回は、学生が友達や先生に読んでもらいたい本を紹介するという形で行なった。どのような本が登場するか期待と不安半々であったが、学生の選択の幅は非常に広いものとなった。テレビ・ドラマや映

画をノベライズした本を紹介した者も居れば、障害者を扱った本、思春期の心の揺れを描いたジュブナイル小説、最新の絵本、また、『サザエさん』等の漫画を紹介する者も居た。中にはミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』のように質が高く、量も多い本を紹介する者も居たが、こういった者は例外である。概観してみると、所謂、「よく売れている本」「ノウハウ本」への関心が非常に高く、純文学や良質な児童文学書への関心が殆ど無いことが分かった。次の世代を生きる子供たちに携わる仕事を目指す者にしては、お粗末な読書体験だと言わざるをえない。個人的には、学生の興味を知ることが出来る良い機会を得たと思う。しかし、学生達には、読書を通して世界観を広げたり想像の世界で遊んだりすることを知って欲しいと切に願うし、薄っぺらな言葉で綴られたお手軽な本ではなく、含蓄のある美しい言葉で語られる物語と親しんで欲しいと心から思っている。

13. 7月10日(木曜日)実施分

(3セミナー合同で実施)

前半は、春学期定期試験受験上の注意や夏期休業期間中の過ごし方についての確認を行なった。後半は、秋に催される大きな行事の準備として、ポスターの製作作業を実施した。この時期になると、セミナー内での交友関係も確立しており、学生達は様々な作業を行ないながらも、友情を深める事に余念が無い。教員側としても、学生の友人関係を把握する良い機会となった。

Ⅲ. 総括

この「入門セミナー」という科目を担当

試してみても最も強く感じたのは、少人数の授業であれば、学生の姿をこんなにも間近で見られるのだという点である。今までは、担当している科目の中で一番小さい単位は「クラス」である。今回の「入門セミナー」は、そのクラスの半分の人数で実施してきた。学生の名前だけではなく、性格や興味の把握も可能となった。学生サイドからも同様に、教員との距離が掴みやすかったのではないかと思う。本来であれば煙たい存在である教員の色々な顔を見る事が出来て、通常の講義では知ることの出来ない姿に接してもらえたと思っている。実際に、学生から個人的な相談を受ける回数が非常に多くなった。人間関係で躓いた学生の退学希望を食い止める事も出来た。この科目を立ち上げる際の、教師と学生との関係を密にするという目的が達成されつつあるのだと受け止めたい。

また、基本技能を伝達・確認する内容の授業の場合、学生は積極的に参加してきてくれた。必要な事だと納得出来れば、進んで習得しようとする姿勢が顕著であった。教員は、こういった素直な学習態度をとすれば、見落としがねない。実際のところ、時間不足のため、学生一人一人が全ての基本的な技能を習得したわけではない。しかし、技能が身に付いている学生、まだ充分でない学生といった判断も、少人数であれば可能となる。継続的な指導もしやすい。こちらの面でも、当初の目的はほぼ果たされたと思われる。

「入門セミナー」という科目は開講されたばかりである。本来であれば6セミナーに対し6人の担当者を配して立ち上げるべき科目であった。それを今年度は3人で担当したために、手が回りかねる部分も多々

あったし、読書や資料活用法といった知的な部分では、殆ど目的を達成出来ていないという現実もある。技能の伝達は比較的容易であるが、知の伝達が如何に難しいかを痛感させられている。こういった問題点を踏まえつつ、次年度の「入門セミナー」をさらに充実させていきたいと考えている。

（文責・青嶋）

IV. 評価

昨年度一年生の担任であった経験を基に、昨年度の一年生（現二年生）との比較も交え、この一年間で感じた「入門セミナー」の果たした役割について、「入門セミナー」の目標とする三つの柱を基に述べて頂こうと思う。

1. 人間関係の構築について

まず始めに人間関係の構築についてであるが、「入門セミナー」の0.5クラス（18～19人）という単位は、教員の学生把握にも、学生が他の学生を理解するにも適当な人数であったと思われる。当初は、同じクラスの前半と後半で担任が異なることに対して違和感や、担当教員の負担増の懸念もあったのだが、「入門セミナー」の授業を経て、学生にはしっくりとした感情が芽生えたようである。一番大きいと思う効果は、学生達がお互いの人間関係や動向について、昨年とは比べ物にならないほどよく把握し合っているということである。実質1クラスの人数は昨年度と変わらないはずであるのに、躓きかけたクラスメイトやその学生をフォローする学生、影響力をもつ学生など、一人に話を聞けばクラスの

全体像が大方把握できる（昨年度は友人でない、知らないと答える者が大多数であった）。その理由を考えたところ、仲良しグループの作り方や構成人数等に特徴があるわけではない。おそらく「入門セミナー」を通じて、友達作りのベースとなる顔見知り（或いは準仲良しグループと言うべきか）のユニットが、昨年より大きくなっていることが原因であると思われる。つまり、クラス内で友人や顔見知りになる努力を要するのは、セミナーの異なる残り0.5クラスの学生だけでよく、しかも、仲良しグループや準仲良しグループのネットをかければ、友達の友達として繋がりのない学生がほとんどいなくなる（かつてはクラスとはそのようなものであったと思うのだが）。しかし昨年度は、仲良しグループも準仲良しグループも、1クラスユニットの中から作らなければならなかったのも、その負担感は大きく異なったのであろう。仲良しグループを形成した後は、精神的に負担感の大きい友達作りは、あまりされていないと感じている。その結果、クラス内に仲良しグループ、準仲良しグループ、友達でない人たちという3種類のグループがそれぞれの学生に存在し、一年以上経過した現在でも、友達でない人たちとの交流はあまりされていないように見受けられる。以上のことから、今年度の0.5クラス担任制と、「入門セミナー」での様々なグループ活動は、学生同士の人間関係の構築に非常に良い影響を与えたと実感している。

続いて教員との人間関係の構築についてであるが、昨年度は個人面接も行い、学生一人一人への対応が決まっていなかった

けではなかった。しかし、結果として、躓いてしまってから教員と接触しようとする者が多かった。また、周囲の学生からの注意信号も、こちらから積極的にアプローチしてやっと思えるか、或いは上述のように、友達でないからわからないという返答しか得られないことも多かった。今年度は、学生同士のネットワークが密であることもあるが、注意信号、黄信号を発する（躓きかけている）学生の情報が、他の学生から迅速に教員側に伝達されている。又、本人から教員へのアプローチも黄信号の段階であり、早期の対応に救われた学生が多い。これは、担当授業以外の時間を共に過ごした「入門セミナー」が、高校までのホームルームの時間の役割を果たし、昨年度よりも担当教員への親近感が増し、クラスへの帰属意識が高くなっているからだと思われる。以上のことから、0.5クラス担任での「入門セミナー」は、学生間の人間関係の構築だけでなく、教員学生間においても、予想以上に効果があったのではないかと感じている。

2. 生活基本技術について

次に生活基本技術についてであるが、これは将来幼児教育の現場に立つ学生自身の力になり、ためになったことはもちろん、保育現場の要望に応えるという面においても、メリットがあったのではないかとと思われる。幼児期は基本的な生活習慣を身につけ、自立に向かう大切な時期である。幼稚園教育要領でも、「身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄など生活に必要な活動を自分でする」¹⁾ことを重要な指導事項としてあげている。しかし一方で、著

1) 幼稚園教育要領 第2章 領域「健康」内容より

が上手に使えない、箒が上手に使えないなど、学生自身の生活能力が低下してきていることも事実である。これに関しては、幼稚園、保育所、施設との実習反省会等において、我々養成校が現場から指摘を受けることも多い。実際、今まで見えなかった学生の一面（生活の部分）を垣間見、担当教員は驚きの連続だったようである。このような様々な生活技術が、「入門セミナー」の授業時間内だけで習得、習熟できるわけではないが、学生の意識の向上と、担当教員が学生の生活技術の習熟度を把握できるという点において、意義があったと思う。昨年度までは、学生の生活技術に関して問題があると認識しながらも、それを把握し改善する機会がなかった。しかし「入門セミナー」の授業を通して、専任教員が生活基本技術の指導をすることにより、学生がその重要性を認識し、日常生活の中で生活基本技術を習熟させようと努力することが期待できる。このことについては、今後の学生の経過に注目したい。

3. 読書について

最後に読書についてであるが、これについては学生が如何に書物や新聞を読んでいないかを痛感している。また、書物に触れ親しんで欲しい、書物を読み取る力を身につけて欲しいと願う意図から、他の柱と同様の比重があったはずであるが、こちらが願うほどの効果は感じられなかった。これに関しては、読書の習慣がないことと、過去の経験不足から読解力がないことの二つの問題が、予想以上に大きいと感じている。学生の活字離れについては話題になって久しいが、学生が知っている話題のニュースソースはテレビに偏っており、映

像情報に偏っている。その結果、ある話題の出来事は知っていても、背景や問題点を理解するには至っていない。しかしそれは映像から得た情報で満足しているからであって、もっと知りたいという意欲、興味があれば、多少は新聞から情報を得ようとするようである。従って、内容の是非はともかく、学生の興味関心を引く題材を選択し、まずは書物に触れる習慣を身につけさせることが肝要のように思われる。もちろん全国で話題になっている活字離れの問題が、数回の授業で顕著に改善されるわけではなく、一石を投じたという意味では、学生の将来に好影響を与える可能性もある。また、通年で機会を与える、他教科との連携を図るということも、今後は視野に入れていく必要があるであろう。質の高い、物事を深く考察できる幼児教育者を育成するために、そして学生自らがそのような意識をもつためにもこのような機会は重要であり、更に検討を進めていきたいと思う。

以上が、私個人が感じた「入門セミナー」の効果と、それを経た現在の一年生像である。現在、保育ニーズは多様化し、それに見合った学生の育成は、他の養成校でも大きな問題となっている。今年度導入した「入門セミナー」を手がかりに、時代に即応した学生指導に一層努力したいと思う。そして、今年度、0.5クラス×2という変則的なクラスを担当して下さり、学生へのきめ細やかな指導と、専門教科以外の内容に取り組み、ご尽力下さった先生方に感謝を申し上げたい。

（文責・岡本）

参考資料1 学期当初学生に配布した予定表

1	4月18日	ガイダンス テキストの紹介 セミナー用のノート作成を中心に、大学でのノートの取り方を説明
2	4月25日	図書館研修(各セミナー毎) ——大学で学ぶとは——(志望動機や目標を確認するための作文を書く・600字) 生活技術習得度のチェック
3	5月1日	新入生歓迎会 ①2年生(S.T.)の協力を得て、リクリエーションを中心とした親睦会を開催 ②2年生(S.T.)の協力を得て、学生生活の在り方を知り、授業・実習への心構えや準備についてのノウ・ハウを学ぶ
4	5月9日	技能研修① 竹とんぼ作り(小刀の扱いを中心に習得)
5	5月16日	技能研修② 大根鉄砲(小刀・鋸・錐の扱いを中心に習得)
6	5月23日	本を読む① ——大学生, 市民, 人間として——
7	5月30日	資料整理法——新聞記事の読み方・スクラップとは・継続して記事を追う——
8	6月6日	救急救命法を学ぶ(日程変更の可能性有り)
9	6月13日	社会的施設の利用方法を学び、学外での集団行動を体験する
10	6月20日	学外研修・プラネタリウム(日程は土曜日を予定)
11	6月27日	技能研修③ 鉛筆・箸を使う 紐を結ぶ・編む 紐を使った手品
12	7月4日	本を読む② ——保育者, 教育者として——
13	7月11日	終りに——まとめと反省・定期試験・夏期休暇の連絡体制等——

参考資料2 教員推薦図書一覧

	タイトル	著者	出版社
大森 隆子	窓際のトットちゃん	黒柳徹子	講談社
	日本の幼稚園	上笙一郎・山崎朋子	理論社
	本・子ども・絵本	中川李枝子	大和書房
芳賀 弘人	貝になった子ども	松谷みよ子	理論社
	高瀬船	森 鷗外	岩波文庫
	マヤの一生	棕 鳩十	ポプラ社
藤本 逸子	子どもの替え歌傑作集	鳥越 信	平凡社
	音楽史17の視座	田村和紀夫・鳴海史生	音楽之友社
	メント・モリ	藤原新也	情報センター出版局
前田キミヨ	保育の根っこにこだわろう	村田保太郎	全国社会福祉協議会
	きょうのせんせい, どんなかな	清水えみ子	教育出版
	記念日がいっぱい	清水えみ子	ひかりのくに
青嶋由美子	もりのこびとたち	エルザ・ベスコフ	福音館書店
	夢十夜	夏目漱石	岩波書店
	色の名前	ネイチャー・プロ 編	角川書店
佐野真一郎	人間の壁(上・中・下)	石川達三	岩波現代文庫
	二十歳のころ	立花 隆	新潮文庫
	思考と行動における言語	S. I. ハヤカワ	岩波書店
鈴木 哲喜	ゼラルグと人喰い鬼	トミー・ウンゲラー	ほるぷ出版
	森の隣人ーチンパンジーと私ー	ジェーン・グールド	朝日新聞社出版
	無縁, 公界, 楽	網野善彦	平凡社
岡本 雅子	世界がもしも百人の村だったら	池田加代子 再話	マガジンハウス
	「いじめ」と幼児期の子育て	平井信義・本吉圓子	萌文書林
	ある知的障害者の呟き	谷中 修	文芸社